

まえがき

西 成彦

「外地の日本語文学」の一翼を担ったのは、「国家語」としての日本語を創作言語として「採用」adoptしたというより、日本語文学の「養子にされた」adopted（コンラッド）植民地出身の作家たちであったが、もうひとつの翼を、日本語を「第一言語＝母語」だと信じて疑わない「内地籍」の日本人（以下、「内地人」と表記）が担ったことは無視できない。今日の韓国では、植民地出身の日本語作家が「二重語」이중어의作家と呼ばれる傾向にあるようだが、かたことの韓国＝朝鮮語を口にはしても、あるいは韓国＝朝鮮語の歌謡などに郷愁を覚える心性を身につけることがいくらかはあろうとも、けっきょく「二重言語使用者」の域にまで達することのできた層は一握りにすぎなかった「内地人」の作家たちが、しかし「外地の日本語文学」を考えたときには半端ではなく大きな存在感を示している。日本の植民地統治期の「外地文学」の一部を担ったのが「内地人」であったというばかりではなく、敗戦後の「引揚げ」を体験した「内地人」の戦後文学のなかでもまた、「外地」の記憶は少なからず重たい意味を持つことになったからだ。

このような日本植民地主義の盛衰を踏まえつつ、「外地の日本語文学」なるものを地球規模・惑星規模で位置づけようとするときに、まっさきに視野に入ってくるのは、コロンブス以降の西洋植民地主義が産みだした膨大な量の作品群である。それこそ、『緋文字』（ホーソーン）から『伝奇集』（ボルヘス）や『百年の孤独』（ガルシア＝マルケス）まで、それらはアメリカ文学やラテンアメリカ文学の「古典」であるよりも前に、まず「外地ヨーロッパ人の文学」の代表作として受けとめるべきである。日本国内にアイヌ系先住民族がいまも住まうように、南北アメリカ大陸でも、先住民族の末裔は、「外地ヨーロッパ人」の言葉を用いながら、権利主体として一定の存在感を示しつつある。しかし、いまさら南北アメリカ大陸の「古典」から「外地ヨーロッパ人の文学」の作品群を完全に締め出すことは難しいだろう。加えて、南北アメリカ（ここにカリブ地域を加えてもいい）の「外地ヨーロッパ人の文学」には、それが拠り所とするのと同じヨーロッパ言語をアクロバティックにあやつる「アフリカ系アメリカ人」や「インド系アメリカ人（＝イースト・インディアン）」の文学が誇らかに並走する状況が生まれてきている。日本内地周辺との比較で言えば、出自を問わず、旧＝蝦夷地（北海道）や旧＝琉球王国（沖縄県）で起きている日本語文学の氾濫に相当することが、南北アメリカ大陸では、もっと大きなスケールで生じているのだ（豪州やオセアニア地域の現実も似通ったものである）。強いて言えば、旧＝蝦夷地や旧＝琉球王国には、旧＝宗主国以外の土地からの大規模な労働力移入が、大幅に露骨な形ではなされなかったというだけである（サハリン生れの朝鮮人引揚げ日本語作家、李恢

成はかなりレアなケースだ)。

それでは、角度を変えて、敗戦後の「引揚げ」を国民的記憶として有する日本のケースを考えてみよう。すると、今度は「インドシナ」や「北アフリカ＝マグレブ地方」からの「引揚げ」経験を有する「元＝外地フランス人」や、カリブ地域からの「引揚げ」を運命として引き受けた「元＝外地英国人・フランス人」の文学を、比較対照の対象に据えるべきだろう。また、かならずしも「植民地」の名で呼ばれることが多くはないものの、そもそも東部ヨーロッパ地域の出身者で、第二次世界大戦後、「収縮」したドイツへの帰国＝再定住を迫られたドイツ人の「引揚者」たちの作品群（G・グラスやJ・ボブロフスキ）もまた、日本の「引揚者の文学」との比較可能性を有している。

かりに旧＝宗主国の「国家語」を用いようと、あるいは自分たちの「民族語」を文学言語として練り上げながら駆使しようと、その区分は問わず、旧＝植民地地域から台頭した数々の文学を「ポストコロニアル文学」の名で総称するとして、まさにその陰画のような形で「世界文学空間」を埋め尽くしている旧＝宗主国系の文学のなかでは、かつての植民地主義の記憶をめぐって、そして、第二次世界大戦後の「脱＝植民地化」がもたらした人間の移動にまつわって書き記された文学が、いまなお強い存在感を誇っている。

アパルトヘイト期の南アフリカが産み出したヨーロッパ系の英語作家、J・M・クツェーは、自分たちヨーロッパ系南アフリカ人の文学を、同国のアフリカ系作家たちの文学と差異化するために「ホワイティング」と称したことがある。しかも、アパルトヘイト撤廃後の南アフリカから豪州へと移り住み、そこでもまた新しい「ホワイティング」の可能性に賭けた彼のような作家は、決して、20世紀後半から21世紀初頭にかけての「世界文学空間」のなかで異色の存在だとは言えない。たとえば、ここ数十年のノーベル文学賞受賞者のなかには、アフリカ系合衆国作家のトニ・モリソン、トリニダード出身のV・S・ナイポール、セントルシア出身の詩人のデレク・ウォルコットらとまったく同じ資格で、アフリカ在住経験のあるヨーロッパ系の作家たち（クツェーの他に、ナディン・ゴディマー、ドリス・レスリングなど）が堂々と名を連ねているのである。「ホワイティング」という言葉を拡張して用いるならば、南北アメリカ大陸や豪州・オセアニアから産み出される文学の大半は、ブレなくその範疇に収まる。

そして、そうした旧＝外地（＝植民地）の記憶にとりつかれたヨーロッパ系作家のなかには、日本語文学における「引揚げ」経験者の文学との比較を促す形で、たとえば、アルベール・カミュやマルグリット・デュラスなど、フランスの戦後文学で重要な位置を占めてきた作家たちの名前をもまた見出すことが可能だろう。

「近代日本の精神史における大きな欠落をはじめて描き出す！」とのふれこみで刊行されたフランス文学者、渡邊一民の『〈他者〉としての朝鮮』（2003）は、「三・一独立運動」とその鎮圧（1919）から、ソウル・オリンピック（1988）あたりまでの「内地人」と「韓国・朝鮮人」との非対称な関係性を一望に見渡す画期的な著作だが、そこで渡邊は、「小林勝、後藤明生といった朝鮮生まれの植民地二世」を筆頭に、日野啓三『喪われた道』（1971）、古山高麗雄『小さな市街図』（1972）などを取り上げながら、フランス文学者としては、ある意味、自然・必然的な流れとして、ヨーロッパ系の「引揚げ文学」のことを思い浮かべている。

ヨーロッパの戦後植民地文学というと〔中略〕カミュの作品のほか、ドリス・レスリングの『草は歌っている』(一九五〇)やマルグリット・デュラスの『太平洋の防波堤』(一九五〇)が挙げられるだろう。

植民地での経験や記憶にとりつかれた「内地人」の文学に対して、日本の文学研究者が本格的なまなざしに向けた先駆的な例として、われわれは渡邊の指摘に真摯に耳を傾けるべきである。それよりさらに先駆的な比較文学研究の試みとしては、島田謹二の『華麗島文学志』(書籍での刊行は1995)が挙げられるが、そこで引き合いに出されている作品群は、せいぜい一九四一年止まりで、やむをえないことながら、カミュやレスリングやデュラスのことは視野に入っておらず、なによりその「比較植民地文学」の試みには、「〈他者〉」としての現代人(島田が取り上げた「台湾文学」の場合で言えば、「本島人」や「原住民」)に対するまなざしが情けないほど欠落している。そこではエキゾティシズムの対象としての「外地=植民地」に目が向けられはしても、「内地人」のまなざしに応じ、まなざし返してくる「〈他者〉」へとあらためて対峙することを迫られてしまう「内地人」の居心地の悪さがまったく不問に付されてしまっているのである。なにより、「ポストコロニアル文学」の萌芽を豊かな形で示していた「〈他者〉」の筆になる文学に対する冷淡な姿勢は、今日から見れば致命的である。

というわけで、本企画では、20世紀後半における「ポストコロニアル文学」の台頭を尻目に、同じ「ポストコロニアル文学」の名では呼びづらい、「引揚者」たちの文学を、いかにして「世界文学空間」は、現代文学の「古典」たらしめることができるのかを問うてみたい。

日本では、2007年から刊行が開始され、2012年に全30巻を完結させた『池澤夏樹=個人編集 世界文学全集』が話題を呼んだばかりだが、そのなかには渡邊の言及している『太平洋の防波堤』と同じデュラスの『愛人(ラマン)』(1984)、そして、旧=英領カリブのドミニカ島出身のヨーロッパ系英語作家、ジーン・リースの『サルガッソーの広い海』(1966)が収められている。日本植民地主義の副産物として文学を考える上で、西洋植民地主義によってもたらされた参照すべき事例は、これらに尽きるわけではないが、これらは、日本植民地主義の後始末のなかで、ひょっとしたら産まれえたかも知れないリアリティを背景に擁している。これは今後、日本語で書かれた「引揚者の文学」を考えるときのために数多くのヒントを与えてくれる作品群である。そして、地球規模・惑星規模で「引揚者の文学」の品定めをおこなうには、こうした「比較」を念頭に置いた作業が不可欠だろう。

本企画では、こうした見取図の下に、言語圏を越えて、「引揚者の文学」をめぐる比較可能性を問うことにしたい。

——2012年5月12日開催の国際言語文化研究所環カリブ文化研究会と科学研究費補助金基盤研究(C)「比較植民地文学研究の基盤整備」(研究代表者:西成彦)の合同企画は、同年6月10日の日本比較文学会におけるシンポジウムを準備する過程のものであったが、本誌収録の論文3本は、同シンポジウムでの質疑応答をも踏まえて、大幅に再構成されたものである。なお、同シンポジウムではここに投稿いただいた三名のほかに、中村和恵(明治大学)さんにもパネ

リストとして登壇いただいたが、その内容と多少重なる文章が「サン・ピエール壊滅——ジーン・リース研究ノートの余白に」として同人誌『北と南』Vol. 3（編集・発行：河内卓，2012年10月15日発行）に収録されていることを情報として書き添えておく。